

【文献レビュー】

眼精疲労に対する抑肝散加陳皮半夏の臨床効果 —CFFによる検討—

原著論文 眼精疲労に対する抑肝散加陳皮半夏の臨床効果 —CFFによる検討—. あたらしい眼科 35: 271-274, 2018

ほしあい眼科(埼玉県) 星合 繁

ストレス社会の現代では眼精疲労の要因に心因的要因が推察される。しかし、眼科での睡眠薬や抗不安薬などの処方患者への心理的負担が懸念される。そこで、精神神経症状を伴う眼精疲労患者を対象に、神経症や不眠症に適應を有する抑肝散加陳皮半夏に着目し、眼精疲労に対する有用性を客観的評価法で検討した。その結果、CFF値の回復が認められ、自覚症状(眼の疲労、首や肩のこり)のスコアの有意な低下が認められた。

Keywords 眼精疲労、抑肝散加陳皮半夏、CFF、精神神経症状

はじめに

眼精疲労にはさまざまな要因があるが、自律神経が乱れやすいストレス社会では心因的要因も推察される。しかし、眼科での睡眠薬や抗不安薬などの処方がかえって患者に不安を与えかねない。そこで、漢方薬の抑肝散加陳皮半夏に着目し、客観的指標を用いて眼精疲労に対する有用性を検討した。

対象および方法

2014年3月から2016年6月に当院を受診した眼精疲労患者のうち、問診でイライラや不眠などの軽度な精神神経症状が確認され、本調査に同意の得られた24例を対象に、クラシエ抑肝散加陳皮半夏(KB-83)7.5g/分2を原則として4週間以上投与した。抑肝散加陳皮半夏投与前、投与2~3週、4~6週に視力検査、自覚症状としてアンケート調査(眼症状、身体症状)、眼精疲労の客観的指標として中心フリッカー(critical flicker frequency; CFF)検査を行った。自覚症状は、眼症状(疲労、違和感、かすみ、乾燥、眼痛、充血、痙攣)および身体症状(首や肩のこり、頭痛、イライラ、不安、不眠、疲労感、めまい)の各症状に対して4段階(3:とてもそのように感じる、2:少し感じる、1:ほぼない、0:まったくない)で評価した。CFFは網膜神経節細胞から一次視覚野へのニューロンのインパルス伝達を反映すると考えられており、疲労の蓄積とともに低下する。今回の患者は背景にCFFへ影響する器質的疾患はなく、CFF値が要精査にあたる正常下限以下(26~34Hz)の場合を対象とした。

結果

患者背景

登録24例中13例(脱落6例、データ欠損3例、CFF正常4例)を除外し、解析対象はCFF異常11例(18眼)、アンケート調査は不備があった2例を除く9例とした。

自覚症状の推移

症状スコアの推移を図1に示す。投与前と比較し投与後4~6週にて、「眼の疲労」および「首や肩のこり」のスコアが有意に低下した。

CFF値の推移

CFF値の推移を図2に示す。18眼中7眼が正常範囲内に改善した。CFF値(平均±SD)は、投与前 30.9±2.6Hz、投与後2~3週 32.2±3.0Hz、投与後4~6週 33.1±3.6Hzと推移し、投与前と比較して投与後4~6週で有意差が認められた。

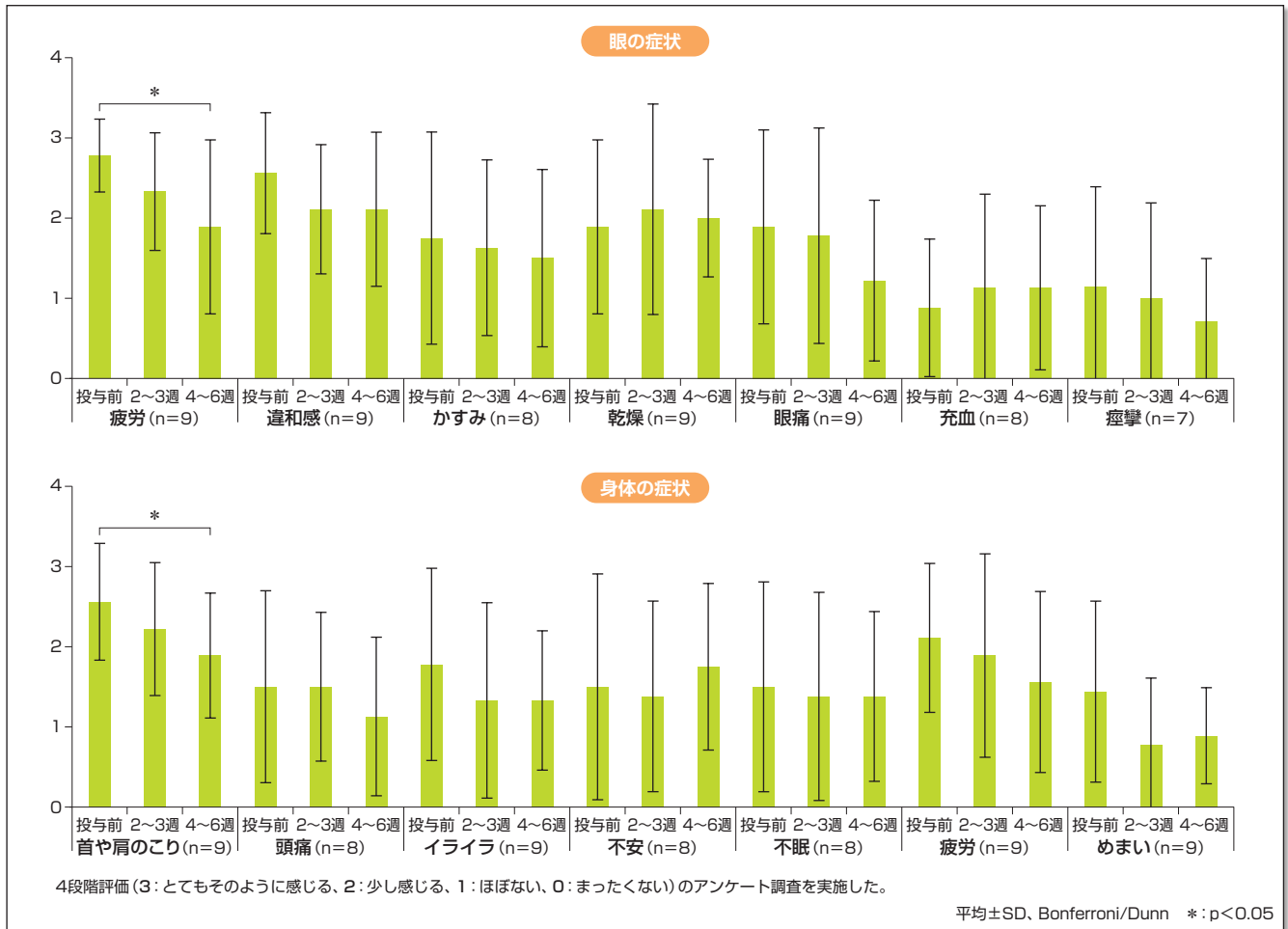
安全性

調査期間中、抑肝散加陳皮半夏に起因すると思われる副作用はみられなかった。

考察

抑肝散加陳皮半夏は、小児の夜泣きや疳の虫のために創薬された抑肝散に陳皮と半夏を加えた漢方薬である。本剤の処方目標は、イライラして怒りっぽい、眠れないなどの症状であり、神経が高ぶる患者に用いられ、神経症や不眠

図1 自覚症状

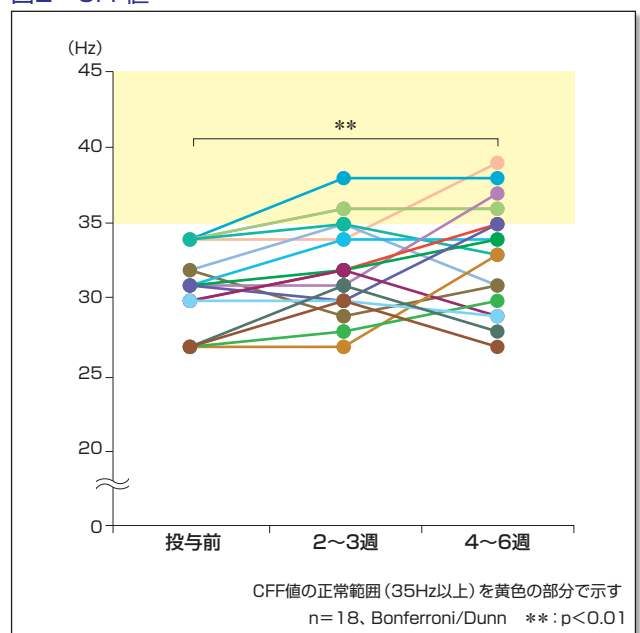


症の適応を有し、アトピー性皮膚炎やめまい、眼瞼痙攣など、精神的なストレスの関与が示唆される疾患に対する有用性が報告されている。

CFF値の低下は疲労研究領域では、一般に精神疲労の発現や大脳中枢の覚醒レベルの低下とも関係すると言われている。抑肝散加陳皮半夏は神経保護作用を有することから神経の信号伝達機能を改善し、疲労を回復する可能性が考えられる。神経の疲労回復には一定の時間を要すると考えられることから、抑肝散加陳皮半夏の投与は少なくとも4~6週の継続投与が必要と考える。また、抑肝散加陳皮半夏の頭頸部領域における血流改善作用により、首や肩のこりを緩和し、眼精疲労を改善する可能性が示唆される。

眼科の診察において、精神神経症状を自発的に訴える患者は少ないが、ストレスの多い現代では、眼精疲労の要因にイライラや睡眠障害などが潜在することはまれではない。投薬の心理負担をかけず症状を改善しうる抑肝散加陳皮半夏は、治療選択肢の一つとして有用と考えられる。

図2 CFF値



[本稿は、あたらしい眼科に掲載された文献を、著作権に配慮し許可を得て掲載したものです。]